

「骨盤臓器の MRI 診断」

島根医科大学助教授・放射線部 杉 村 和 朗

筑波大学教授・臨床医学系放射線科

板 井 悠 二

MRI (磁気共鳴画像) が臨床に登場して 10 年近くの歳月がたつ。本法は神経系をはじめとし全身の大部分の臓器で有用性が高く、Mr Imaging の名に恥じない。本書の扱っている骨盤諸臓器も有望なものが多く、既に婦人科疾患のみを扱った単行本も出版されている。近年 surface coil (endorectal を含む)、Gd 造影剤、高速撮像の導入と臨床経験の蓄積により更にその価値を増している。

本書は MR の技術的側面、骨盤解剖の総論に始まり、子宮、卵巣、前立腺、膀胱・女性尿道、男性外性器、直腸の各論へ進み、血流イメージングでしめくられている。MR 技術の解説は簡潔でレベルも高く、内容も豊富であり、解剖もわかりやすい。各論では各章ごとに、その臓器の MRI の意義の short summary に始まり、検査手技をはさんで MR 診断に必要な解剖 (一部生理的事項を含む)、正常 MR 像が再度より細かく記載される。その後、疾患の MR 像が示され、読影のポイント、画像診断における MR の役割を示すほぼオーソドックスな構成をと

る。

本書を読んで何よりも感じることは、この本は MRI の臨床に情熱をもやし、かつ画像医学に精通している人によって書かれたものだという事である。著者とその執筆協力者達は主に骨盤臓器を中心に MRI の臨床研究を行っている。磁気共鳴医学会へ行くと、展示を中心に骨盤領域でやたらと因幡の白兎 (島根医大の校章) が目につく。MR の導入が遅かったこともあり、婦人科領域では Hricak H, Togashi K の後塵を拝しているが、勢力的な仕事ぶりで追い上げ、国際的にも広く認められは始めている。

解剖の記述も、MR 像の解釈も要点をおさえ、教えられるところが多く、全体のバランスととも著者の心配りが行き届いている。その考え方は合理的であり、手前味噌を避け、常に他検査法との意味づけを考慮しながら MRI の有用性を引き出す努力が随所で感じられる。

自分ではその領域に何のめぼしい寄与はせず、人の業績をうまくまとめあげて素早く本を書く人も多い。これはこれで知識の整理には役立つ。

本書はこの面での最新知識を教えるのみか、MRI の実地に関与し、色々な疑問を持つ人に多くの的確な情報を与えてくれる。Gd による造影の臓器・疾患での意味づけ・解釈の相違や、生検と MR 検査の時期など本当に汗を流してやっている者ならではの記載が多く、実地の手引きとしても大いに役立つ。

この好著に一点注文をつけるなら矢印の使い方である。矢印の先端が意識的に対象物の内部に置かれているが、境界を正しく認識することは画像診断にとって極めて重要である。次版では境界部に置き、読者が誤った解釈をせぬよう是非改めていただきたい。

本書は MRI 実用化を告げる時代にふさわしい、骨盤臓器全般について記した初めての本格的単行本である。放射線医のみならず、この領域の臓器を扱うすべての医師に是非読んでほしい書として広く推薦したい。

● B5 288 頁 図 63 写真 445
原色図 2 1993 定価 15,450 円
(税込) ㊦ 400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)